

# すい そく けん 睡足軒

## 建物の来歴

元は飛騨地方にあった江戸時代中～後期の民家だが、古美術商・山中定次郎やまなかさだじろうが

買付け、京都に移していた。それを建築家・仰木魯堂おおぎろどうが購入し、さらに松永耳庵まつながじあんが譲り受け、昭和13年(1938)に現在地に移築した(『茶道三年』より)。耳庵の死後は平林寺ののむらげんりょうが譲り受け、宿坊として利用された。平成14年(2002)、平林寺第24世野々村玄龍ののむらげんりょう老師から市に貸与され、伝統文化の継承と青少年の育成の場として活用されている。

## まつながじ あん やすざえもん 松永耳庵（松永安左工門）

「電力の鬼」とも呼ばれ、益田鈍翁ますだどんのう・原三溪はらさんけいとともに「近代三茶人」の一人に数えられる。所沢の柳瀬荘おうりんかく(黄林閣)、小田原の老櫓荘ろうきょそう、そして野火止の睡足軒と、古民家を移築・改装して別荘とし、我流の茶を楽しんだ。当時の平林寺第21世峯尾大休みねおたいきゅう老師と親交が深く、平林寺三門の仁王像一対を始め、多くの美術品を寄進した。死後は平林寺に墓が造られ、夫人とともに今も眠っている。

## 「睡足軒」の由来

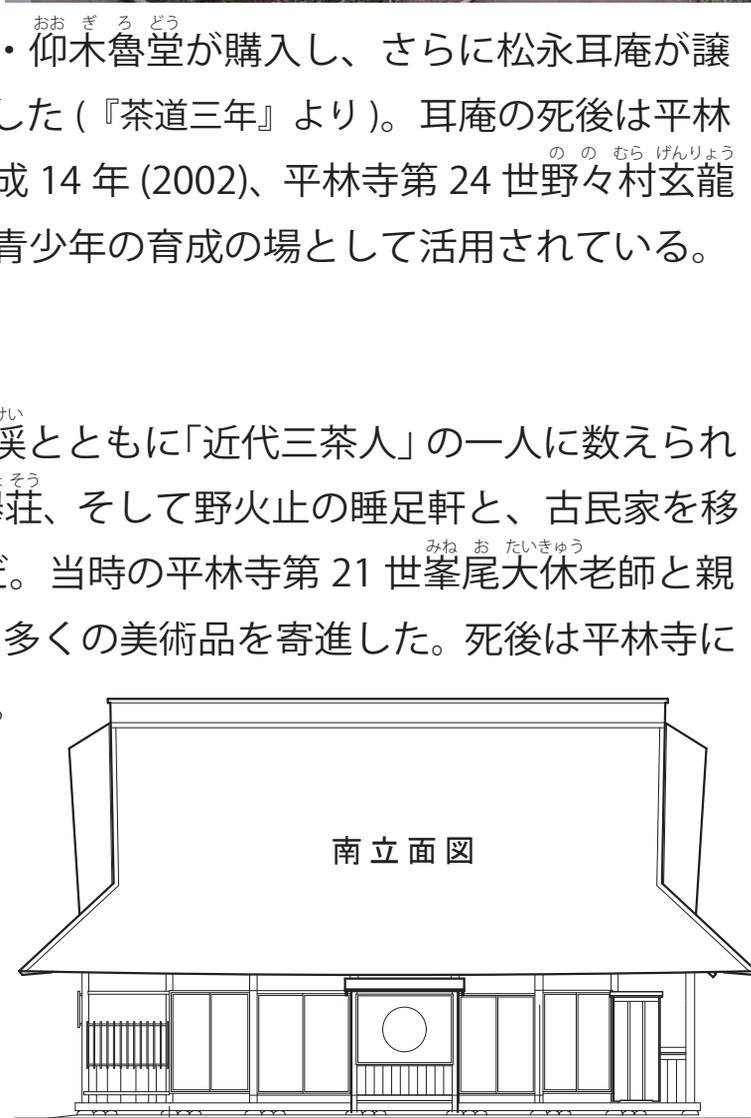
平林寺が岩槻にあった頃、「睡足軒」という塔頭があったが、野火止に移転した後、明治期に睡足軒は売却されてしまう。耳庵が古民家を移築した際、大休老師が「睡足」という名を与え、耳庵は「睡足居」と名付けた。平林寺が譲り受けた後、「睡足軒」と名を改め、現在に至っている。そもそもの「睡足」については、中国の唐代の詩人・白居易の「香炉峰の雪」から引用したものではないかと推測される。

## 建物の見どころ

- ・豪雪の重みに耐えうる太い建材(柱・梁など)。特に、「股柱またばしら」を多用した古民家は残存例が少なく、国の重要文化財に指定されたものもある。

例：福井県旧瓜生家住宅うりう、坪川家住宅、堀口家住宅、岐阜県旧吉真家住宅よしざね

- ・耳庵の趣向を凝らした改装と、移築前の痕跡(二つの茶室、天井、馬屋など)



### 柱の孔

移築前の外壁には、茅や板が張られ、雪を防いでいたのだろう。その痕跡が2つ見えるため、飛騨から京都、そして新座へと、2度移築した伝承と一致している。

### 円窓 (エンソウ。マルマドとも言う)

睡足軒のシンボルの1つ。丸い窓は月を表し、仏の教えを意味している。窓の向こうには、四季折々の景色が広がる。

### 股柱 (マバシ)

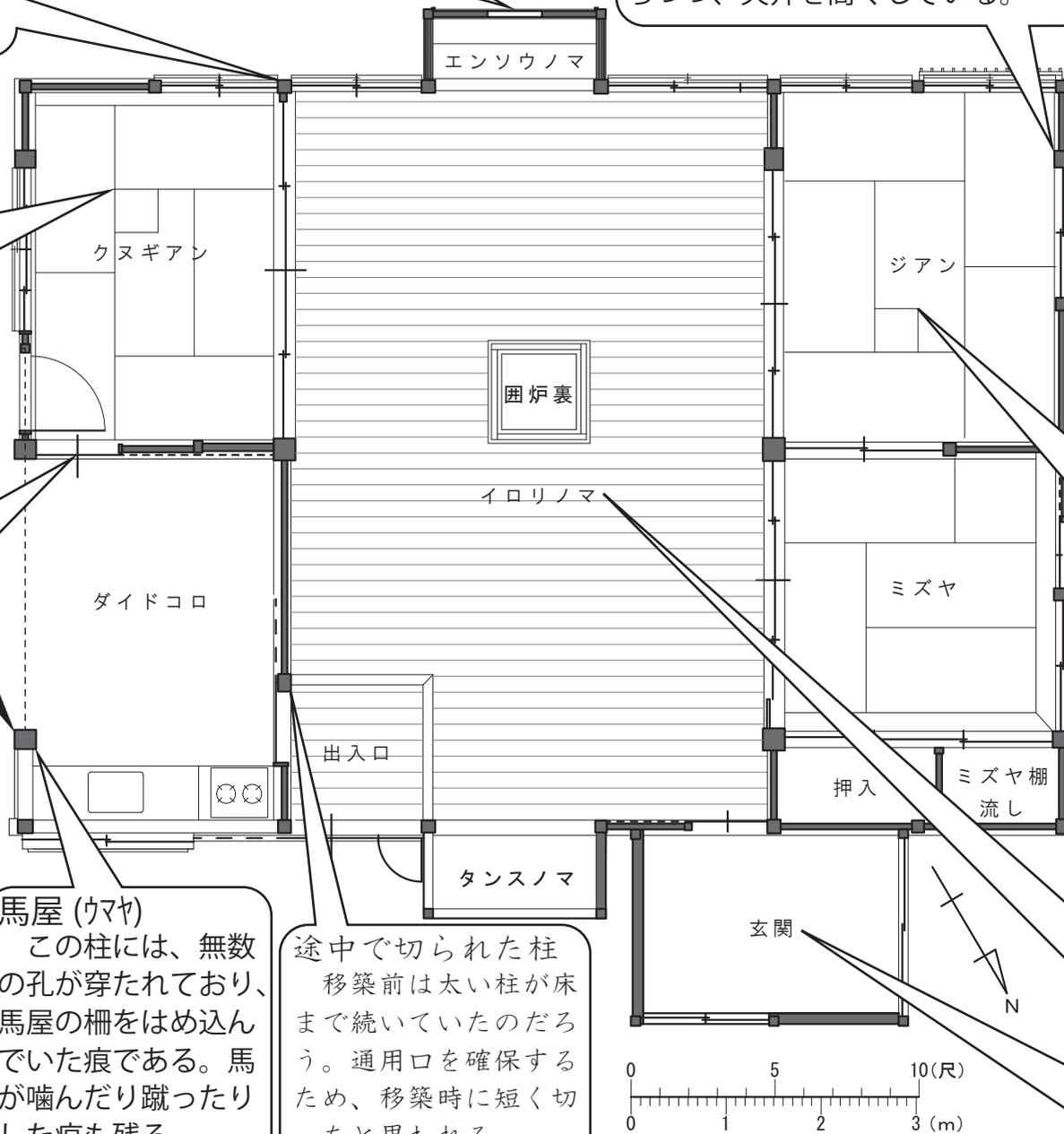
建物の両妻 (側面) にあるが、ここが最も見えやすい。二股に分かれた天然木を活用することで、強度を保ちつつ、天井を高くしている。

### 櫓庵席 (クヌギアンセキ)

櫓庵は、元は馬屋から続く土間だった。建物の玄関も、図の左上の辺りにあったと思われる。天井には竹が張られている。睡足軒内は、部屋ごとに天井が異なるのも注目すべき点である。

### 低い鴨居

台所 (水屋) から茶室への通り道は、鴨居が低く、頭を下げて入る。移築時に鴨居を低くしたのではなく、元は土間だった床面を高くしたものである。



### 耳庵席 (ミアンセキ)

移築前も玄関から遠い位置にあり、格の高い部屋だったのだろう。茶人耳庵もここに炉を構え、茶を楽しんでいたと思われる。天井梁にも、自然木と製材を組み合わせ、趣向を凝らしている。水屋との位置関係が通常とは逆になっている。

### 十字梁 (ジュウジバリ) と手斧梁 (テウノバリ)

太い梁を十字に組むことで、本来、中央にもう1本必要な柱を省略でき、広々とした囲炉裏の間が確保された。湾曲した手斧梁は、天井を高くすることに一役買っている。

### 玄関

現在の出入口だが、平林寺が宿坊として便所を増築した箇所である。平面図上も、少し出っ張ったような形になっている。

### 馬屋 (ウマヤ)

この柱には、無数の孔が穿たれており、馬屋の柵をはめ込んでいた痕である。馬が噛んだり蹴ったりした痕も残る。

途中で切られた柱 移築前は太い柱が床まで続いていたのだろう。通用口を確保するため、移築時に短く切ったと思われる。

凡例：当初の民家、耳庵の改装、平林寺の増築

